

# 目次

## 序章 二十世紀アメリカの文化と政治 研究の視角

一 アメリカにおける映画と政治 2

二 文化と政治 9

三 レーガン研究の現状 12

四 本書の構成 21

## 第1章 「僕の残り半分はどこだ？」メディアによる人格形成

一 アイルランド 34

二 「ダッチ」 41

三 ユーレカ大学 56

四 「心の劇場」——スポーツ・アナウンサー時代 63

五 「夢の工場」——ハリウッド 74

六 スターへの道 89

七 「セルロイドの爆弾工場」——戦時下のハリウッド 93

第2章 『バック・トゥ・ザ・フューチャー』 「赤狩り」と一九五〇年代 117

一 「内通者T10号」——あるいは、「レーガン都に行く」 118

二 離婚と再婚、そして「アイ・ラブ・アイク」 138

三 『GE劇場』へようこそ！ 156

四 『バック・トゥ・ザ・フューチャー』再び 171

第3章 「右派のFDR」 市民政治家の台頭 195

一 「ザ・スピーチ」 196

二 「市民政治家」の誕生 217

三 一九七六年大統領選挙——レーガンの挑戦と挫折 244

四 「ジミーって、だれ？」 259

五 一九七〇年代の映画 272

第4章 レーガンの時代の始まり 295

一 一九八〇年大統領選挙 296

二 レーガン政権の発足 318

三 大統領撃たれる

339

第5章 再選をめざして

369

一 レーガン不況から攻勢へ

370

二 「悪の帝国」と「スター・ウォーズ計画」

381

三 SDIの背景は何か

386

四 「アメリカの朝」

399

五 レーガン時代の映画

414

第6章 任務完了！「われわれが勝ち、彼らが負ける」

441

一 「ゴルビー」登場

442

二 「アナス・ホリビリス」

460

三 醜聞から成功へ

472

四 レーガン三選

486

五 晩年

502

終章 比較の中の「銀幕の大統領」

521

一 比較1——前任者たち

522

二 比較2——「レーガンの子供たち」

529

三 比較3 — 盟友たち

538

あとがき

563

主要参考文献

567

関連年表

583

映画索引

589

人名索引

606

事項索引

610

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

だ？」という叫びが当てはまる。本書では、この乖離にできるだけ架橋したい。

#### 四 本書の構成

まず、第1章では、レーガンの誕生からハリウッドでの活躍までの半生をたどる。現代大統領制が確立し、古典的ハリウッド映画がそれを熱心に応援した時代である。『僕の残り半分はどこだ？』という最初の自伝のタイトルが示すように、それはエンターテイメントから政治へ、リベラルから保守へ、最初の結婚から二度目の結婚へという、彼の人生の変遷の前半部分に相当する。そして、ラジオから映画、テレビへとというメディアの変遷にも呼応している<sup>82)</sup>。

第2章は、主として一九五〇年代を扱う。政治的には、それはドワイト・アイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower) 政権下の保守優位の時代であり、冷戦の時代であった。国内的には、大統領もハリウッドも「赤狩り」に苦しんだ。「レーガンの時代」たる八〇年代は、政治的にも文化的にも、この五〇年代を模倣・再現した側面が多い。本書では、五〇年代と八〇年代の比較を意識してみたい。

第3章では、レーガンが「右派のFDR (F・D・ローズヴェルト)」として期待を集め、カリフォルニア州知事、さらには大統領候補になる軌跡をたどる。その背景には、公民権運動の高まりやベトナム戦争の深刻化、そして、ウォーターゲート事件による現代大統領制の動揺があり、さらには、政治のエンターテイメント化とセレブの政治化があった<sup>83)</sup>。この間に、現代大統領制は深手を負い、古典的ハリウッド映画は終焉した。

第4章から第6章は、レーガンの大統領時代である。ただし、個別の政策を検証するのではなく、先述

のように、映画を中心とした文化と政治の関係、そして、現代大統領制を再建しようとするレーガンの政治スタイルやコミュニケーション・スキルに注目する。

終章ではそれまでの分析をふまえて、レーガンの政治的リーダーシップのスタイルや映画と政治の関係について、縦軸と横軸の比較を通じて考察する。縦軸では、まず同じアメリカ大統領として、ニクソンとカーターを検証する<sup>(84)</sup>。次いで、ジョージ・W・ブッシュをはじめとする「レーガンの弟子たち」「レーガンの子供たち」の系譜を扱う。たとえば、映画俳優からカリフォルニア州知事に転じたアーノルド・シュワルツェネッガー (Arnold Schwarzenegger) は、レーガンの亜流と言えよう。もちろん、ドナルド・トランプ (Donald Trump) もレーガンを意識している<sup>(85)</sup>。横軸としては、同時代の他国の政治指導者の中からサッチャーと中曾根康弘を取り上げ、とりわけ、日本での研究として後者に注目する<sup>(86)</sup>。こうした比較を容易にするために、レーガンの人生をたどる過程にも、彼らには時々「出演」してもらおうことになるだろう。

それでは、レーガンを案内役として、二十世紀アメリカの映画と政治の相互作用をめぐる旅に出るとしよう。

◆注

(1) これを「リュミエールの映画史観」とする批判もある。加藤幹郎『映画館と観客の文化史』(中公新書、二〇〇六年) 四六―四八頁。

(2) ジャン・リュミエール・フロドン／野崎歓訳『映画と国民国家』(岩波書店、二〇〇二年) 二二六頁。

(3) ヴァルター・ベンヤミン／浅井健二郎編訳／久保哲司訳『複製技術時代の芸術作品』『ベンヤミン・コレクション』

I―近代の意味』(ちくま学芸文庫、一九九五年)。

SALT-II) についで、「塩 (salt) が効きすぎて身体に悪い」と冗談の種にしてきた。その SALT-II は、ソ連のアフガニスタン侵攻のために、連邦議会上院で批准ひんたされないまま、それこそ「塩漬け」になっていた。交渉再開を求めるソ連のレオニード・ブレジネフ (Leonid Brezhnev) 書記長からの親書を、新大統領は受け取った。だが、これは明らかに観測気球である。レーガンは交渉には乗らず、しかし、ヘイグの助言を容れて、SALT-II の枠組みを遵守するバランス感覚を示した。

そこまではよかった。だが、レーガンにとっても「トロイカ」にとっても、新政権の最優先の政策課題は経済であり、インフレと失業問題への対応であった。ニクソンもそう助言していたし、それは世論調査の示すところでもあった。他方、ヘイグは対ソ外交の巻き返しを最重視していた。時として国務長官は大統領よりも過激で、キューバについて「あのいまましい (f---g) 島を駐車場にしてやろう」と語ることをさらあつた<sup>(70)</sup>。

国防長官はワインバーガーである。彼はかつてレーガン知事の財務長官を務め、ニクソン政権でも行政管理予算局長として大胆な予算削減策を実施して、「キャップ・ザ・ナイフ」(Cap the Knife) の異名をとった。しかし、彼はレーガン以上の対ソ強硬論者であり、国防予算の大幅増額に務める。ワインバーガーはしばしば色鮮やかな図表を用いて説明し、大統領の理解と支持を得た。これに対抗すべく、国家安全保障問題担当大統領補佐官はハリウッド風の短編映画を制作して、各国首脳についての大統領の理解を促す。ワインバーガー国防長官はヘイグ国務長官とは権限をめぐって、後述のストックマン行政管理予算局長とは予算をめぐって、激しく対立する。

そのストックマンは回想している。国防予算についての大統領への説明に、ワインバーガーは「尊大な漫画を持ってきていた。三人の兵士が描かれている。一人は何も武器を持たないピグミーだった。カータ

ー予算を象徴していた。次の男はウッディ・アレンのような顔をした、四つ目のいかにも弱虫の感じで、小銃を持っている。これは——私かも？——OMB [Office of Management and Budget, 「行政管理予算局」]の防衛予算だ。最後の一人はまさにGIジョーで、体重が一九〇ポンドもありそう。ヘルメットと防弾チョッキを着こみ、M—60マシンガンを威嚇するように——「またも私に向けて？——構えている。この堂々とした兵士は、そう、国防総省の予算案を表していた」「あまりにも幼稚で卑しくて、ハーバード出の閣僚が、よくこんなものを合衆国大統領に見せられたなど、私は信じられない気持ちだった。彼は、ホワイトハウスがセサミ・ストリートに出演中だ、とても思ったのだろうか？」<sup>(71)</sup>。ストックマンは皮肉たっぷり語っているが、映画やテレビと融合したレーガン政治の本質を期せずして描写しているのである。

大統領選挙で陣頭指揮をとったケーシーは、待望の國務長官ではなくCIA長官の職に就いた。彼も対ソ強硬論者であり、アフガニスタンやポーランドで秘密工作を重ねる。「ビル・ケーシーのCIAは、レーガン大統領に客観的な情報を報告するどころか、大統領を喜ばせるための情報をとりそろえた。だが、それは単にレーガンの政策を支援するための情報ではなく、ビル・ケーシーの政策選好を支えるCIAのデータであった」<sup>(72)</sup>。彼は辣腕<sup>らつわん</sup>だが、言語不明瞭で日ごろから謎めいていた。のちに、ケーシーもワインバーガーも、イラン・コントラ事件で重大な責任を問われることになる<sup>(73)</sup>。

財務長官には、ドナルド・リーガン (Donald Regan) が起用された。ウォール街の大手証券会社メリル・リンチの会長兼最高経営責任者 (Chief Executive Officer: CEO) として、辣腕を振るった人物である。彼はサプライサイド経済学に基づいて、後述のように「レーガノミックス」を推進した。政権二期目にはベーカーと交代して大統領首席補佐官となり、「首相」のあだ名を進呈されたが、政敵が多く、とりわけ大統領夫人のナンシーと対立する。

先述のストックマン行政管理予算局長は弱冠三十四歳、過去百五十年間で最も若い閣議出席メンバー（閣僚級）となった。彼はハーヴァード大学神学部を卒業しただけあって原理・原則にうるさく、レーガン以上にレーガンのに予算削減を徹底しようとした。社会保障費を守り国防費を増やし、予算均衡よりも景気回復を優先する大統領の姿勢を、彼は理解できなかった。また、ヘイグ同様、ストックマンも「トロイカ」を中心としたホワイトハウスの運営に反発する。

ストックマンは大統領候補だったアンダーソンの元側近であり、ベーカーはフォード、ブッシュ陣営にいた。運輸長官に起用されたルイスも、一九七六年の大統領選挙に際してペンシルヴァニア州でレーガンの勝利を阻んだ人物である。八〇年の大統領選挙でコナリー候補の陣営で報道官を務めたジェームズ・ブレディ（James Brady）は、大統領報道官に任じられた。リンカーンが有力な政敵を四人までも主要閣僚として政府に迎えた故事は、「チーム・オブ・ライバルズ」（Team of Rivals）としてよく知られている<sup>(74)</sup>。実は、レーガンも同様の人事を行っていたのである。

いかにもレーガンらしい人事もあった。一九七六年の共和党予備選挙で副大統領候補に選んだシユワイカーを、保健福祉長官に起用したのである。負け戦に付き合った返礼である。また、長身の二枚目俳優ジョン・ギャビン（John Gavin）がメキシコ大使に任命された。彼はジェームズ・ボンド役にキャスティングされたこともある（実現はしなかった）。レーガン同様、ギャビンもSAGの委員長を務めていた（七二―七三年）。大使としては、彼は麻薬対策に尽力し、メキシコでの反米感情に対峙した。

ただし、関心の乏しい分野の人事では、レーガンは側近たちの助言に頼った。たとえば、サミュエル・ピアース（Samuel Pierce）住宅都市開発長官である。彼はレーガン政権の閣僚の中で、唯一の黒人であった。だが、レーガンとピアースの関係は、相棒もの映画とはほど遠かった。ピアース長官が黒人の市長た

ちの一人をオーヴァル・オフィスに連れて行った時、別れ際にレーガンは彼にまで「さよなら、市長」と声をかけたのである。これは人種差別的な態度ではなく、無関心の発露であった。

レーガンはのちにヒスパニック系を史上初めて閣僚に起用するし、八年間で三人の女性を入閣させてもいる。その一人が民主党の対ソ強硬論者ジーン・カーク・パトリック (Jeanne Kirkpatrick) で、女性として初めて閣僚級の国連大使の職に就いた。また、大統領はサンドラ・オコナー (Sandra Day O'Connor) を、これも女性として初めて最高裁判所判事に指名している。女性票やマイノリティー票の獲得が少ないことを、それだけ意識していたのである。

明らかに失敗の人事もあった。レーガンは教育省の廃止を選挙公約にしていたが、果たせず、テレル・ベル (Terrel Bell) を長官に据えた。だが、ベルは議会の一部や教職員組合とも連合して省益の拡大を図る。また、保守派の意向を受けて、ジェームズ・ワット (James Watt) を内務長官にしたものの、彼は環境保護に反対し、規制緩和を極端に進めたため、議会共和党の支持さえ得られなかった。「私は民主党員と共和党員という表現を用いない。リベラルとアメリカ人とだ」と彼は公言し、民主党を侮辱しさせた。ワットは二年足らずで退任に追い込まれる。こうした人事の失敗は保守派の失望を招き、「レーガンをレーガンらしくしろ」と憤る者も少なくなかった。

また、レーガンの地元カリフォルニア州のスタンフォード大学にあるフーヴァー戦争・革命・平和研究所 (Hoover Institution on War, Revolution, and Peace) や、アメリカン・エンタープライズ公共政策研究所 (American Enterprise Institute)、『リテージ財団 (Heritage Foundation)』とった保守系のシンクタンクが、新政権に豊かな人材とアイデアを提供した。ヘリテージ財団などは、一六〇〇人もの学者の名前をコンピューターに登録して、政策論争やイデオロギー論争に備えていた。F・D・ローズヴェルト政権や

ケネディ政権で東部の名門大学の教授たちが果たした役割を、レーガン政権ではこれらのシンクタンクが担ったのである。

このように、カリフォルニア州以来の譜代か外様か、イデオロギー重視の保守派か実務重視の穏健派か、内政優先か外交重視かと、レーガン政権の人間関係は幾重にももつれ合って対立し、映画さながらの宮廷劇が展開される。そのため、情報漏洩は日常茶飯事となる。

### 迷宮の中の日常

この迷宮の中で、レーガンは国家元首としての象徴的な機能を巧みに果たしながらも、行政府の長としては効果的な統治にいたらなかった。「われわれの右手は左手が何をしているのかをつねに知っているわけではない」と彼自身が語ったように、政権内の混乱が顕著であった。多くの場合、レーガンは政策の詳細には習熟せず、いったん決断すると、部下たちにその実行を全面的に委ねた。大統領の関心と直感が連動すればうまくいくが、そうでないと時として悲劇を招くことになる。だが、「実際のイデオログ」として、レーガンは基本的に柔軟で現実的であったし、彼に最も大きな影響力を持つ妻ナンシーも、夫の評判を守るためにイデオロギーではなく現実に基づいて対処しようとした。

知事夫人時代と同様、否、それ以上に、ホワイトハウスでもナンシーは華美で贅沢だと批判された。一九八二年三月に著名なジャーナリストたちの晩餐会で、彼女は中座し、黄色のブーツなど奇抜な品々に身を包んで再登場して、「古い洋服、古い洋服ばかり」と当時の流行歌の替え歌を歌って満座を沸かした。華美という日ごろの批判へのお返しであった。また、政権二期目になると、ナンシーは『ホワイトハウスでのパフォーマンス』というテレビ番組の司会を務め、若手の芸術家たちを世に紹介した。彼女もファース

ト・レディーとして、ハリウッドでの経験を巧みに活用したのである。これもジャクリン・ケネディを意識した結果であろう。

レーガンには、怠惰だという批判がしばしば向けられた。たとえば、高齢の大統領は毎日昼寝の時間をとり、あまり働かなかつたと批判されるが、正確ではない。彼は昼寝をしなかったし、オーヴァル・オフィスを去る時には通常多くの書類を持ち帰り、夜遅くまで原稿を書き日記を綴った。「緊急時にはいつでも私を起こすようにと命じてある。たとえ閣議の最中でも例外ではない」——レーガンは力んで反論するより、得意のジョークで批判をかわした。

レーガンは大統領職に敬意を示し、オーヴァル・オフィスではつねにネクタイとジャケットを身につけていた。だが、ホワイトハウスを離れることにも熱心で、可能なかぎり週末はキャンプ・デーヴィッドで過ごした。そこでの夜に、レーガン夫妻は往年のハリウッド映画や時には最近の映画を楽しんだ。一九八一年一月三十一日にボブ・クラーク (Bob Clark) 監督／ジャック・レモン主演のコメディ『マイハー ト・マイラブ』(Tribute 1980) を観賞してから、八九年一月十四日に自らが出演した『バファロウ平原』を堪能するまで、大統領夫妻が観賞した映画は確認できるだけで三六〇本を超える。自分の出演作では、『ギッパ』を演じた『ニュート・ロッキニー』が一番のお気に入りであった<sup>(76)</sup>。

だが、意外にも在職中に最も頻繁に映画を見た大統領は、カーターである。その数は、四年間で四〇〇本である<sup>(76)</sup>。レーガン大統領はコメディを最初に観賞したが、カーターがホワイトハウスで最初に観た作品は、『大統領の陰謀』であった。「私はリチャード・ニクソンがかつて身をおいたこの場所と責任が、今は自分のものである現実には奇妙な感じを抱いた」と、彼は一月二十二日の日記に綴っている<sup>(77)</sup>。

そのニクソンも映画愛好家で、大統領在職中の五年七カ月間に観賞した映画は五〇〇本を数える。とり

わけ、一九七〇年のカンボジア侵攻の際には、彼は公開直後のフランクリン・シャフナー監督『パットン大戦車軍団』(Putton, 1970)を二度も観賞している。大統領はかつての「よい戦争」に思いを馳せ、昔の上司アイゼンハワーを回想したのであろう。ニクソンやカーターのような内省的政治家の方が、映画との対話を必要としたのかもしれない<sup>(78)</sup>。

さて、レーガン夫妻はしばしばカリフォルニア州の牧場にも帰った(大統領としての八年間のうち、夫妻は通算で一年をカリフォルニアで過ごしている)。そこでシャツを腕まくりしてジーンズをはき、乗馬を楽しむ大統領の姿は、彼の健康を示すとともに、フロンティア精神に満ちた過去とアメリカの未来を結び付けるイメージ戦略でもあった<sup>(79)</sup>。他方で、これがレーガンをかつての「カウボーイ俳優」や「西部劇俳優」とする誤解や、それをタカ派イメージに結び付ける曲解の一因ともなっている。

ホワイトハウスでの端正なスーツ姿とカリフォルニアでのジーンズ姿は、威厳と庶民性というレーガンの包括性を示している。

レーガンはリラックスした姿勢で、滅多に激昂することはなかった。老眼鏡を机の上に投げ捨てるのが、彼の最も強い怒りの表現であった。また、他人の話を遮ることもほとんどなかったが、会議中に大統領がジェリー・ピンズを食べ出すと、それは退屈の合図であった。

### 初年の諸政策

まずは経済政策である。レーガンの計画は単純であった。インフレを抑え、国防費を除く予算を削減し、規制緩和と減税を行い、予算を均衡させるといふものである。リベラル派はこの矛盾の多い政策を「レーガノミックス」と呼んで揶揄した<sup>(80)</sup>。

大統領就任の当日に、レーガンは連邦政府による新規雇用と備品購入を凍結し、その直後に旅費とコンサルタント料の削減を命じた。こうした象徴的な行動の後、二月五日に大統領はテレビで演説して、「アメリカは大恐慌以来、最悪の経済的混乱にある」と訴えた<sup>(81)</sup>。何しろ、連邦政府の財政赤字は八〇〇億ドルに達し、インフレ率一二パーセント、失業率七・五パーセント、金利は二〇パーセントであった。レーガンによれば、七〇〇万人に上る失業者が三フィート間隔で並べば、メイン州の海岸からカリフォルニア州にいたることになる。得意の視覚的イメージの喚起である。ラジオの術と言えよう。また、このテレビ演説の際に、大統領はわかりやすい図表を使って、巧みに説明を展開した。これは彼が求める説明スタイルでもあった。こうした重要なテレビ演説とは別に、毎週土曜日に大統領はラジオを通じて国民に語り掛けた。レーガンのラジオへの愛着と信頼がうかがえる。

こうした世論への働き掛けの上で、二月十八日にレーガンは議会に赴いた。大統領はここで、①六年間で五四九三億ドルの財政支出削減、②三年にわたる個人税の一律一〇パーセント削減、③環境問題などの社会的規制を含む、政府規制の大幅な撤廃、④安定的な金融政策の運営を柱にした「経済再生計画」を発表した。一九八一年の段階で、アメリカが抱える累積債務は一兆ドルに近づきつつあり、ドル紙幣で積み重ねると六七マイルに達すると、ここでもレーガンはわかりやすい視覚的比喩を繰り出した。ただし、①に関しては、国防支出は六年間で一六九二億ドルの増額を見込んで、支出削減は具体性に欠けた。有権者は原則として政府の支出削減には賛成だが、具体的には自らにかかわる予算の削減には反対である。つまり、「理論的には保守派」であり「運用上はリベラル派」なのである<sup>(82)</sup>。当然、減税は支出削減よりも容易である。レーガンは減税を優先させることによって、「経済のルピコン川」を渡るよう有権者に呼び掛けたと、歴史家のプランズは指摘している<sup>(83)</sup>。

もちろん、ブッシュ上院議長（副大統領）はもはや、これを「お呪いの経済学」とは呼ばなかった。しかし、下院で多数を握る民主党は難色を示した。とりわけ、オニール下院議長は手ごわかった。彼はレーガン同様に陽気なアイルランド系で、おそらくカーターとよりはレーガンの方が、個人的には気心が知れていた。レーガンとオニールの間には、午後六時以降には政争はしないとの合意すらあった。しかし、オニールは百戦錬磨の、しかも党派心剥き出しの政治家であり、『最後の歓呼』の市長のように義理人情としたたかな駆け引きの世界で育ってきた。下院議長は大統領を「逆ロビン・フッド」として描こうとしていた<sup>(84)</sup>。

外交面では、レーガン政権は一月二十八日に最初の国賓として韓国チヨンドフワンの全斗煥大統領をワシントンに迎え、米韓関係の改善を図った。同盟関係強化のためには、軍事クーデタで権力を掌握した者も歓迎し、カーターのように人権問題をふりかざさないという意思表示であった<sup>(85)</sup>。二月二十五日には、イギリスのサッチャー首相がやって来た。米英両首脳は対ソ関係やポーランド情勢、中南米での共産主義勢力の進出、経済問題などを議論し、あらためて意気投合した。ホワイトハウスの会議室では、レーガンが机の上のジョーリー・ピーンズに三〇もの風味があることを指摘し、「ピーナッツ味をどける時間がまだなくてね」とジョークを発した。ピーナッツ農園の経営者だったカーターへの皮肉である。イギリス大使館でのパーティーでは、サッチャーが「夜の二時に目を覚まして、自分が直面しているすべての課題を思い出しても、それに耐えるだけの勇氣」が必要だと挨拶した。レーガンはこれにいたく感動したという<sup>(86)</sup>。レーガンのリラクセスした姿勢とサッチャーの生真面目な態度は好対照だが、二人は強い信念と使命感を共有していた。サッチャーは支持率の低下に悩んでいたが、この訪米の成功は、少なからず彼女を助けた。また三月の世論調査では、六六パーセントのアメリカ人がレーガンの経済政策を支持しており、レーガン政権も

好調な出だしとなった。

### 三 大統領撃たれる

#### 『タクシー・ドライバー』の再演

ところが、深刻な試練がレーガンを襲った。

リンカーン以来、二〇で割り切れる年に当選した大統領は、在任中に不遇の死を遂げるというジンクスがあった。「テカムセの呪い」(Tecumseh's curse)と呼ばれる(テカムセは呪いをかけたとされる先住民の酋長の名前)。レーガン大統領の当選は一九八〇年であり、実際に大統領暗殺未遂事件が発生したのである。

一九八一年三月三十日の夜には、アカデミー賞の授賞式が予定されていた。「銀幕の大統領」は、すでに祝辞のテープ録音を終えていた。アカデミー賞に大統領がメッセージを贈った最初は一九四〇年で、F・D・ローズヴェルトによる。午後二時十五分前にホワイトハウスを出て、二時からワシントン・ヒルトン・ホテルでアメリカ労働総同盟・産業別組合会議 (American Federation of Labor and Congress of Industrial Organizations: AFL-CIO) の建設業部門全国大会で演説し、二時三十五分にホテルを出てホワイトハウスに戻り、三時十分から下院歳入委員会の共和党メンバーと懇談するという、あわただしいスケジュールであった。かつてハリウッドで労働組合の委員長を務めたレーガンは、AFL-CIOの会員だったことのある、現在のところただ一人の大統領である。もちろん、AFL-CIOは共和党を支持していなかったが、トラック運転手の組合など一部はレーガンを支持しており、大統領はブルーカラー層に「レーガン・デモクラット」を拡大する必要を感じていた。そこで、彼は古い組合員証まで帯同した。レーガン

は例によってAFLの創立者サミュエル・ゴンパーズ(Samuel Gompers)を引用し、「人が自分であることやしなければならぬことを、代わりにやってしまうのは、危険なことだ」と、個人の責任を重視し、過度の社会福祉を批判した。

二時二十七分のことである。ホテルを出てリムジンに乗り込もうとした時、レーガンはボン、ボン、ボンという花火のような、小さな破裂音を耳にした。「いったい何だ、これは？」と、大統領は振り向いて尋ねた。ブレディ大統領報道官とシークレット・サービスが一人、警官が一人、倒れていた。犯人らしい青年に、シークレット・サービスと警官が何人も覆い被さった。この衝撃的な動画は、事件直後から繰り返し放映された。ケネディ暗殺の際に、動画が規制され長らく静止画像が用いられていたことは、大きく異なる。

シークレット・サービスの責任者ジェリー・パー(Jerry Parr)が、大統領を強引にリムジンに押し込んだ。「ローハイドは無事」と、彼は大統領のコードネームを用いて、シークレット・サービスの本部に無線連絡した。だが、レーガンはそれまでに経験したことのない激痛を感じていた。「君は私の肋骨を一本折ったらしいぞ」と、大統領はパーに文句を言った。そうではなかった。すでにレーガンの白いシャツは真っ赤に染まって、流れ出た血があわ立っていた。呼吸も困難になってきた。パーはとっさに目的地をホワイトハウスから変更して、近くにあるジョージ・ワシントン大学病院に急行させた。

リムジンが病院に到着すると、瀕死のレーガンは何とズボンのしわを伸ばし、ジャケットのボタンをとめて、立ち上がった。そして、シークレット・サービスに挟まれながらも、彼は急患用の入り口まで自ら歩いていった。院内に入るや否や、大統領は崩れ落ちた。女性看護師は脈拍を確認できなかった。「死んだ」と、シークレット・サービスの一人が思わずつぶやいた。だが、担架で運ばれている最中に、大統領

は意識を半ば取り戻した。受付のインターンが患者の名前を尋ねた。「レーガン。R—E—A—G—A—N」と、同行したディーヴァー大統領次席補佐官が呆れながら答えた。「ファースト・ネームは?」、「ロン」。住所は?、「ペンシルヴァニア通り一六〇〇番」。インターンは絶句した<sup>(87)</sup>。

ナンシーは病院に急行した。レーガンは酸素マスクを外して、「ハニー、頭を下げてかわすのを忘れてたよ」とささやいた。一九二六年にボクシングの世界チャンピオンを奪われた夜、ジャック・デンブシーが妻に語った言葉である。青春時代の記憶であり、スポーツ・アナウンサーとして繰り返してきた話題であろう。ナンシーの方こそ、「お願い、話をしないで」と言うのがやっとであった。

少し遅れて駆け付けたベーカーとミースを見ると、「だれが留守番してるんだ?」と、レーガンは問い掛けた。また、手術室に運ばれる途中、患者の手を握る女性看護師に、「ナンシーには内緒だよ」と瀕死の老人はつぶやいた。さらに、麻酔をかけられる前には、大統領は医師たちを見回して、「あなた方がみな共和黨員だといんですがね」と語り掛けた。答えた医師も気が利いていた。「大統領閣下、今日われわれは全員共和黨員ですよ」(実は、彼は民主黨員であった)。

生死の境にあってなお、レーガンはユーモアを失わなかった。これを元俳優の習性とみなすことは容易だし、これまでもブラウン知事やニクソン、フォード、カーターの各大統領ら、数々の政敵が彼を元俳優と過小評価してきた。しかし、今回の事件で、多くのアメリカ人はレーガンに政治家の雅量、指導者の胆力を看取した。ケネディ大統領やキング牧師の暗殺に匹敵しうる事件を、レーガンはまるで映画のエピソードのように演出したのである。そう、流行のハイ・コンセプトのように明確に、古典的ハリウッド映画のようにハッピーエンドに。「近年にこのような(人格の)誇示を目標したことはない。われわれの大統領を誇りに思う」と、民主党リベラル派のダニエル・パトリック・モイニハン (Daniel Patrick Moynihan)

上院議員ですら語っている<sup>(88)</sup>。

もちろん、その後もレーガンへの過小評価は続いた。民主党の長老クラーク・クリフォード (Clark Clifford) などは、ディナーでの私的な会話とはいえ、レーガンを「愉快な間抜け」(amiable dunce) とまで酷評した<sup>(89)</sup>。同じく民主党の長老ウィリアム・フルブライト (J. William Fulbright) 元上院議員も、「他人が用意したせりふカードがなければ何もしゃべれない。そんな男が立派な政治指導者になれるはずがない」と回想している<sup>(90)</sup>。だが、ほとんどの場合、カードの科白はレーガン自身によって推敲が重ねられていた。旧世代によるこうした党派的な酷評は、大方の共感を得るところではなくなった。

さて、いよいよ手術が始まった。リムジンに当たって跳ねた弾丸が大統領の左脇から入り、心臓近くで止まっていた。ホテルを出てからリムジンまでの距離が近かったため、シークレット・サービスは大統領に防弾チョッキの着用を求めていなかったのである。弾丸の射入孔が小さく、医師たちは発見に手間取った。手術は四時間に及び、大量の輸血を要した。やがて意識を回復したレーガンは、看護師に言った。「もしハリウッドでこれほど注目されていたら、ずっとあそこにいただろうね<sup>(91)</sup>」。本人はジョークのつもりだったかもしれないが、これは正鵠<sup>せいく</sup>を射ている。

犯人はジョン・ヒンクリー・ジュニア (John Hinckley, Jr.) という二十五歳の若者で、精神を病んでいて。彼は女優のジョディー・フォスターに多くの手紙を送り、彼女と交際していると思込んでいた。すでに述べたように、そのフォスターが十二歳の娼婦役を衝撃的に演じたのが映画『タクシー・ドライバー』であった。そして、この作品の中で、主人公が大統領候補を暗殺しようとする。ヒンクリーはこの映画を一五回以上も観ており、フォスターの関心を惹くために、自ら実際の大統領の暗殺を企てたのである。当初の目標はカーター大統領であったという。ブッシュ副大統領も、ヒンクリーから脅迫状を受け取った

ことがある。

これまで述べてきたように、『タクシー・ドライバー』のエピソードは、一九七二年大統領選挙でのウォレス暗殺未遂事件を下敷きにしており、この暗殺未遂事件は映画『時計じかけのオレンジ』の暴力性に触発されていた。映像から現実へ、そして現実から映像へと、映画と政治の関係が循環していた。その上、撃たれたレーガンは元映画俳優であり、彼は事件を映画のように演出してみせた。さらに言えば、彼を救ったジェリー・パーは、子供のころにレーガン主演のシークレット・サービスの映画を観て、この特殊な職業を志したのである。さらに、これらの映画をシークレット・サービスの経験者が監修していた。当夜に予定されていたアカデミー賞の授賞式も、この事件のために一日延期された。キング牧師暗殺の時と同じである。そして、この授賞式で主演男優賞に輝いたのは、スコセッシ監督『レイジング・ブル』(Raging Bull, 1980)に主演したロバート・デ・ニーロ (Robert De Niro)であった。あの『タクシー・ドライバー』でも、この二人がコンビを組んでいる。レーガン暗殺未遂事件には、映画が幾重にも関係しているのである。

「リンカーンを撃ち抜いた弾丸がガフィールドを、マッキンレー [William McKinley] をも貫通したあげくに、一九世紀から二〇世紀への扉をこじあけ、シオドア・ローズヴェルトの華々しい登場を用意したことは、疑いようがない」<sup>(92)</sup>と、アメリカ文学者の異孝之はかつて記した。この響ひびにならえば、キューブリックの解き放った暴力がウォレスの一命を狙い、スコセッシによって銀幕に回収された上で、「銀幕の大統領」の華々しい活躍を用意したことも、ほとんど疑いを容れない。この間に、ニューディール連合が崩壊して、南部でレーガン・デモクラットが誕生し、レーガン革命の地ならしがなされたのである。さらに、映画的なイメージが現実に影響を与えたという意味では、この暗殺未遂事件の延長線上に、二〇〇

一年九月十一日の同時多発テロを置くことができよう<sup>(98)</sup>。「政治は現実であり、映画は虚構の世界だ」とフルブライトは批判するが<sup>(94)</sup>、そのように単純な二分法は当たらない。

もちろん、この事件ものに、サイラス・ノーラスティ (Cyrus Nowrasteh) 監督『レーガン 大統領暗殺未遂事件』(*The Day Reagan Was Shot*, 2001) としてテレビ映画化されている。『ランボー』(*Rambo*) シリーズの常連リチャード・クレンナ (Richard Cranna) がレーガンを演じた。また、クラーク・ジョンソン (Clark Johnson) 監督『ザ・センチネル 陰謀の星条旗』(*The Sentinel*, 2006) の冒頭には、レーガン暗殺未遂事件の映像が配されている。この事件で自ら被弾して大統領を守ったベタランのシークレット・サービスが、この映画の主人公である。ただし、くだんのシークレット・サービスは、今ではこともあろうに大統領夫人と不倫している。レーガンは現代大統領制の威信を再建しようとしたが、その後のクリントンの不倫騒動などで、それは再び大きく傷ついてしまうのである。

#### 回復と余波

七十歳という高齢にもかかわらず、レーガンの回復は早かった。さすがは乗馬を愛する元水難救助員である。翌日の夜には、延期されたアカデミー賞授賞式のテレビ中継を、病室でナンシーと楽しんでいる。レーガンの受難と回復は、『ロッキー』のそれを、さらにはキリストのそれさえ想起させたと、コミュニケーション研究者のクリス・ジョーダン (Chris Jordan) は指摘している。また、スタローン自身が監督まで務めた『ロッキー3』(*Rocky III*, 1982) では、主人公は筋肉を増し肉体改造している。高齢だが健康でスポーツを愛する大統領のイメージも手伝って、一九八〇年代のアメリカはフィットネス・ブームを迎え、<sup>たくま</sup>遅く引き締まった肉体が上昇志向の中産階級のアイコンになる<sup>(95)</sup>。それは一九二〇年代のスポー

一九二〇年代以来、政治家はハリウッドのスターたちを利用してきつてきたし、セレブたちも進んで選挙に協力し、自らの政治的主張を展開してきた。また、レーガン知事の登場以前にも、カリフォルニア州を中心に下院議員や上院議員になった例はある。七〇年代には、スポーツ選手や元宇宙飛行士らも政界に進出した。だが、レーガン大統領の誕生以降は、イーストウッドやシュワルツェネッガーら世界的に著名な大スターが政治的公職に就いた。また、カリフォルニア州にとどまらず、セレブが知事や上院議員になっていった。レーガン時代に政治とエンターテインメントの相互作用が進み、レーガンがロール・モデルを提供したことが、セレブの政界進出に拍車をかけたのである。さらに、レーガン以降オバマにいたる歴代大統領も、ハリウッドのセレブたちをさかんに政治利用しようとしてきた。

### レーガンとトランプ

こうした共和党の保守化（より正確には過激化）とセレブ政治の進展が交差するところで、ドナルド・トランプが登場したと言ってよい。彼は「第二次金びか時代」とも言われるレーガン時代に富を築き、知名度を高めたのである。共和党の主流派が弱体化する中で、トランプは過激な発言で注目を集めた。また、彼は多くの映画にカメラオ出演し、テレビのリアリティ番組に出演して知名度を高めた。その意味では、トランプも「レーガンの子供たち」の一人に属そう。「アメリカを再び偉大にしよう」(Make America Great Again)——そもそも、大統領選挙でのトランプ陣営のこのキャッチフレーズは、一九八〇年の大統領選挙でのレーガン陣営のそれを借用したものである。

ただし、アメリカ政治のこの反逆児は、政治上の父にもそれほど敬意を払ってはいない。レーガンは「実に如才なく巧みにふるまい、国民の心を完全につかんだ。しかし七年たった今、あのスマイルの下に

はたして実体はあるのかと、人びとは疑問を感じ始めている」と、トランプはレーガン時代の一九八七年に出版した自伝に記している<sup>(13)</sup>。

また、レーガンとトランプには顕著な相違点が四つある。第一に、レーガンは神を信じ、自由や民主主義といった理想を語ったが、トランプにはそのような信仰や語彙はない。第二に、前者は共産主義や「大きな政府」といった思想や制度を厳しく批判したが、よほどのことがなければ個人を攻撃することはなかった。他方で、後者は進んで敵を設定し、また、自分に敵対する個人を激しく攻撃する。レーガンがベルリンの壁を壊すよう求めたのに対して、トランプがメキシコとの国境に壁を築くよう主張している点は、両者の相違を象徴しているよう。時あたかも、国境周辺での紛争や越境者を描いたボーダー映画が増えている<sup>(14)</sup>。憎悪をかきたてる政治手法という意味では、トランプはレーガンよりニクソンに似ているかもしれない。第三に、レーガンには大統領就任に先立ち八年にわたるカリフォルニア州知事としての行政経験があったが、トランプにはその種の行政経験は皆無である。そして第四に、アメリカの経済や人口の中心がサンベルトに移動する中でレーガンは台頭したが、その過程で忘れ去られたラストベルトの有権者を動員してトランプは大統領に当選を果たした。現代大統領制を確立したF・D・ローズヴェルトは、孤立主義と闘い続けた。「アメリカ・ファースト」を唱えるトランプ大統領の登場は、現代大統領制の終焉を何よりも雄弁に物語っているのかもしれない。

それでも、レーガンとトランプには興味深い共通点がある。ハリウッド主流派との敵対関係である。レーガンは古い世代のスターたちに知己が多かったが、「赤狩り」時代の彼の言動に反発する者も少なくなかった。また、より若い世代のハリウッド主流派はケネディ的なリベラルを任じ、レーガン政権にはしばしば反発した。同様に、否、それ以上に、トランプの過激な発言にハリウッドのリベラルなセレブたちは

強く反発している。中でも、トランプとメリル・ストリープ (Meryl Streep) との対立は話題になった。この大女優がトランプの「弱い者いじめ」を暗に批判すると、トランプはツイッターで彼女を「最も過大評価されている女優の一人」と非難した。このストリープやジョージ・クルーニーらリベラルなセレブたちは政治的な発言や活動に積極的だが、これもレーガンに反発した若手俳優たちの政治化に起因している<sup>(15)</sup>。

ちなみに、トランプのお気に入りの映画の一つがO・ウェルズ監督『市民ケーン』(Citizen Kane, 1941)だという。メディアを操る自己顕示欲の強い権力者という点で、トランプとケーンは銀幕を挟んだミラー・イメージである。ケーンが未完の豪邸ザナドゥに陣取ったように、トランプはフロリダ州にマー・ア・ラゴという別荘を構え、しばしば賓客をもてなしている。ケーンの末期の言葉「薔薇の薔薇」(Rosebud)の謎を探って、この映画は展開する。アメリカも世界も、しばらくはトランプにとっての「薔薇の薔薇」を問いつけることになろう。

### 三 比較3——盟友たち

比較の横軸として、レーガンと同時代に活躍した他国の政治指導者を検討してみよう。

ニクソンはチャーチルやシャルル・ド・ゴール (Charles de Gaulle) らとも交流があり、中国の周恩来首相のような戦略的大局観のある政治家を自らの好敵手とみなしていた。カーターは非西洋の、しかも宗教的に敬虔な指導者と親しかった。エジプトのサダト大統領や日本の大平正芳首相らである。

レーガンは、反共主義や「小さな政府」の理念を共有する西側の指導者に信を置いた。イギリスのサッ

## レーガンと中曾根

まず、政策についてである。二人とも「遅れてきた指導者」であった。レーガンは最後の機会をつかんで大統領になり、アイゼンハワー以後初めて二期八年を全うした。中曾根は自由民主党内のライバルたちの最後に首相の座を射止め、結果として、当時の日本では例外的に五年の長期政権を運営した。長期政権であったことで、二人は前任者たちよりもまとまった業績を上げることができた。中曾根によると、彼の政治生活は「戦後政治の総決算で、敗戦の結果失われた良きものを取り返し、日本の本来の扉を開くこと」に尽きるという<sup>(27)</sup>。レーガンが「アメリカの朝」を語り、「アメリカを再び偉大にしよう」と呼び掛けたことが想起されよう。ただし、レーガンが克服しようとしたのは、一九六〇年代以降の「大きな政府」と七〇年代のアメリカの衰退であったのに対して、中曾根は戦後すべての「総決算」を謳っていた。そのため、彼が戦前のエリートに属したこともあって、中曾根にはより復古的な色彩が強かった。

また、二人とも「小さな政府」を提唱したが、レーガンは減税に熱心であり、中曾根は行財政改革、つまり歳出削減に重点を置いていた。日本専売公社と日本国有鉄道、日本電信電話公社の三公社の民営化はその最たるものである。だが、日本が膨大な財政赤字を抱えていることもあって、中曾根政権は消費税の導入を図って、これには失敗した。減税による個人や企業の経済活性化を期待する点で、レーガンは中曾根より個人主義的であろう。経済学者の村上泰亮によると、これは多分に文化の問題でもあった。米英の経済自由主義には長い伝統があり、国内のナショナリズムと調和しやすいが、日本ではそれが弱く、まず官僚機構や既得権益集団の抵抗を退ける必要があったからである<sup>(28)</sup>。

さらに、二人は反共主義をも共有していた。ただし、レーガンが超大国の指導者としてグローバルな観点からソ連と対峙し、「強いアメリカ」を唱えたのに対して、「非核中級国家」をめざす中曾根は、「実力

以上のことはやらない」を自らの外交原則の一つにしており、また防衛力の増強に前向きであったが、それは戦略的思考というよりも、「自主独立の国民精神」といったナショナリズムの所産であった<sup>(29)</sup>。

レーガン、そしてサッチャーと同様に、中曾根は鈴木善幸という弱い前任者のイメージの払底に成功し、自らの下で大蔵大臣、自民党幹事長を務めた竹下登を後継指名することにも成功した。だが、これもレーガン、サッチャーの場合と同じく、中曾根の後任も短命に終わった。また、サッチャーと同じく、中曾根はアメリカとの強い絆が権力基盤の強化につながることを熟知しており、国内的リスクを冒してでも「日米同盟」と公言して憚<sup>はか</sup>らなかった。

政治的な人格や手法はどうであったか。

中曾根はレーガンよりも七歳年少、サッチャーよりも七歳年長で、彼らと同様に、群馬県高崎市という地方都市に生まれた。中曾根の母はキリスト教に親しんでおり、彼もその影響で賛美歌を歌い聖書を読むようになったという<sup>(30)</sup>。政治家になってからも、中曾根は好んで坐禅を組んだ。この三人には、牧歌的な地域での成長、親に影響された信仰心という共通点がある。だが、中曾根の生家は「古久松」という関東有数の材木商であり、他の二人よりはるかに富裕な社会層に属していた。中曾根は旧制静岡高校から東京帝国大学法学部に進み、一九四一年に内務省に入省した。やがて、海軍経理学校にも学び、主計少佐として敗戦を迎えた。レーガンとは異なり、戦前の典型的なエリートである。しかし、レーガンやサッチャーと同様に、中曾根も戦争によって自国の国際的地位が激変する経験をした。

戦後すぐに中曾根は政界に入り、民主党、国民民主党、改進黨、日本民主党に属したのちに、一九五五年の自由民主党（自民党）の結党に参加した。占領中には喪中を意味する黒のネクタイを常用し、吉田茂首相に論争を挑んだり、マッカーサー将軍に建白書を送ったりするなどして、彼は信念とパフォーマンス

を巧みに組み合わせ、「青年将校」の異名をとった。中曾根は保守政治家だが、吉田に代表される保守本流とは異なる傍流であり、自民党でも少数派閥に属した。「世界的使命感を持ったよそ者」という意味で、レーガンやサッチャーと通じる。傍流、少数派であるために、強い信念と政策を持ちながらも妥協を繰り返さざるをえず、そのため中曾根は「風見鶏」と揶揄された。レーガンも「実際的なイデオログ」だったが、中曾根よりも庶民的で明るかった。それだけ、レーガンの方が老獪だったのかもしれない。派閥の領袖となり運輸大臣という主要閣僚ポストを経験したのちも、中曾根は一九七〇年に第三次佐藤栄作内閣で自ら「志願兵」として防衛庁長官に就任した。日米関係や安全保障の重要性を意識してのことだという<sup>(31)</sup>。防衛庁長官として、彼は初の『日本の防衛』（防衛白書）を刊行し、民間有識者らによる「日本の防衛と防衛庁・自衛隊を診断する会」を立ち上げて世論の啓蒙を図る一方、自らジェット練習機に乗り込んでみせた。パフォーマンスと言われるのは承知の上だったという。

首相としては、当初は内政上の制約もあって、中曾根はまず得意の外交に活路を見出した。首相就任後最初の外遊先として、彼は韓国を電撃訪問した。日本の首相として初めての公式訪問でもあった。歓迎晩餐会で、中曾根は演説の一部を韓国語で行った。全斗煥大統領とは、日本語、韓国語で歌を歌い合った。「手づくり外交」である。また、レーガン大統領との間では「ロン・ヤス」と呼び合う信頼関係を築き、「不沈空母」といった刺激的な発言も厭わなかった。一九八三年のウィリアムズバーグ・サミットでは、中曾根は安全保障問題にも積極的に発言し、記念写真の撮影の折にはホストのレーガンの横に収まり、日本の存在感を示そうとした。「日本の首相が隅に立つのでは税金を出している国民に申し訳ない」と、彼は考えていた<sup>(32)</sup>。のちには、レーガン大統領夫妻を「日の出山荘」でもてなした。先述のように、「アメリカ人は牧場でいいわけですよ。とくにレーガンさんは馬が好きで、牧場でよく馬に乗っていたから、田

舎に連れていってもいいだろうと思っただけです」と、中曾根は回想している<sup>(33)</sup>。劇団四季の演出家、浅利慶太の知恵も借りた。また八五年にソ連でチェルネンコが死去すると、中曾根は自ら葬儀に赴き、後任のゴルバチョフとの会談を強引に取り付けた。総じて彼は、世界の中の日本を体現しようとし、主要国の指導者たちとの個人的な信頼関係を重視した。

内政では、党内基盤が脆弱<sup>ぜいじやく</sup>であったことや、農家や自営業などの旧中間層から都市部の「新中間層」に支持を広げようとしたことなどから<sup>(34)</sup>、中曾根は一方で直接世論に働き掛け、他方で首相の権限を制度的に強化して、「大統領的首相」として振る舞おうとした。

すでに防衛庁長官時代から、「電通にも頼んだんです。渡辺プロとも提携して、ハナ肇さんや高橋圭三さんに来てもらって、テレビ演説の講習会をやったんです」と、中曾根は語っている<sup>(35)</sup>。ハナは有名なコメディアンであり、高橋は日本初のフリーアナウンサーで、のちに自民党から参議院選挙に出馬し一期務めた。日本版セレブ政治家、いわゆるタレント議員である。また、先述の坐禅やテニス、水泳といった、中曾根の日常生活もテレビに恰好の「絵」を提供した。身長一七八センチの中曾根は、テレビ映えがよかった。レーガン同様、彼は図表を使って、テレビでわかりやすく政策を説明しようとした。

中曾根首相は三公社の民営化を実現したが、これは鈴木内閣時代に彼が行政管理庁長官として取りまとめにあたった、第二次臨時行政調査会の提言に基づいている。この臨調は「国民の参政権の及ばない立法府としての権威」を帯びたとの指摘もある<sup>(36)</sup>。同様に一九八四年には、自由主義的な教育改革のために中曾根首相は臨時教育審議会を設置した。さらに、八五年の靖国神社公式参拝問題でも八六年の防衛費の対国民総生産（GNP）比一パーセント枠の見直し問題でも、中曾根は首相の私的諮問機関を設置して、自らの方針を正当化し実現していった。より制度的には、中曾根首相は八六年に内閣安全保障室を設置し

て、初代室長に警察官僚の佐々淳行を充てた。田中角栄が病に倒れると、中曾根の政治的自由度は増して、八六年の参議院選挙に合わせて衆議院を解散し、圧勝した。そのため彼の総裁任期は一年延長され、後任をめざす竹下、安倍、宮澤喜一の「ニュー・リーダー」に対する影響力も増大した。諮問機関の活用と官邸の機能強化、そして解散権の行使——いずれも「大統領的首相」の面目躍如たるものがある。

しかし、その後のより本格的な内閣機能の強化と自民党総裁の権限を十全に活用し、靖国神社に参拝を続け、そして郵政民営化のために衆議院解散を断行したのは、小泉純一郎首相であった。その上、小泉はワン・フレーズを繰り返して、テレビを効果的に利用した。中曾根の政治手法は、小泉にいたる二十一世紀の新しい政治スタイルを準備していたのである<sup>(37)</sup>。ただし、小泉の「劇場型政治」と「ワン・フレーズ・ポリティックス」は、映画よりも彼の愛した歌舞伎の見得みえに近く、イメージを超えた説明や説得には乏しい。

レーガンとは異なり、引退後の中曾根は精力的に言論活動を続け、日本の政治家には珍しく多くの回顧録を含む書物を刊行した。また、一九八八年には世界平和研究所を設立し、安全保障問題を中心に内外情勢についての研究と政策提言を行っている。引退後も吉田茂が執筆を重ね、五九年に日本国際問題研究所を設立したことを意識していよう。

では、映画と政治の関係を、まず映画と首相の関係から検討していこう<sup>(38)</sup>。

アメリカと異なり、戦前の日本映画が政治指導者を描くことは、ほとんどなかった。当然のことながら、「神聖不可侵」の天皇を映画化することは不敬罪に該当した。皇室についても同様であった。衣笠貞之助監督『日輪』(一九二五年)が、邪馬台国の卑弥呼を描いたことで物議を醸したほどである。昭和天皇については、行幸や観兵式、観艦式などの馬上や車上の姿が数本の記録映画に残っているだけだといふ<sup>(39)</sup>。

戦後では、亀井文夫監督が記録映画『日本の悲劇 自由の声』（一九四六年）で、昭和天皇の姿が軍服から背広に変わるところを映し出して、戦争責任を示唆した。そのため、吉田首相の要請を受けた連合国最高司令官総司令部（GHQ）から、この映画は上映中止にされてしまった（不敬罪の廃止は翌四七年）。

首相は記録映画やニュース映画にはしばしば登場したが、実在か架空かを問わず映画の登場人物になることはなかった。木下恵介監督『陸軍』（一九四四年）は陸軍のプロパガンダ映画で、日清戦争後の三国干渉を回想するシーンに陸軍大臣の山県有朋が登場する。これなどは稀有な例であろう。しかも、科白せりふはない。権力が映画を利用することはあっても、映画が政治権力者を自由な素材にすることはできなかったのである。

戦後の日本映画では、三隅研次監督『巨人 大隈重信』（一九六三年）が大隈の半生を描いており、伊藤博文らも登場する。また、岡本喜八監督『日本のいちばん長い日』（一九六七年）では、ポツダム宣言受諾をめぐる、鈴木貫太郎首相が重要な脇役の一人になっている。昭和天皇も顔の映らない形で登場する（八代目松本幸四郎が演じているが、クレジットはない）。公開年の十二月二十九日に、昭和天皇はこの作品を家族と観賞していたという<sup>(40)</sup>。さらに、森谷司郎監督『小説吉田学校』（一九八三年）が、吉田首相を主人公にしている。「戦後政治の総決算」を提唱する首相の時代に、戦後政治の原点となった首相が、正面から描かれたのである。鳩山一郎、岸信介や池田勇人、佐藤栄作、そして、若き日の田中角栄や中曾根も登場する。

戦後の日本映画には、架空の首相が時折登場してきた。最大のジャンルは近未来のSFである。危機に際してリーダーシップが求められる点では、日米とも共通する。ただし、架空の首相たちは総じて受動的であり、それほど強いリーダーシップを発揮しない。顕著な例外は森谷監督『日本沈没』（一九七三年）で

ある。日本沈没はまさに究極の国家的危機であり、首相は準主役として冷静かつ無私の姿勢で難局に対処する。また、山本薩夫監督『皇帝のいない八月』（一九七八年）では、自衛隊のクレーダを背景に、岸首相を連想させる元首相と佐藤を思わせる現職の首相の葛藤が描かれている。有事法制が政治的争点になってきた時期である。橋本幸治監督『ゴジラ』（一九八四年）では、日本の首相は米ソ対立の狭間で苦悩する。だが、架空の首相たちがより現実的な設定で厳しい決断を迫られるようになるのは、二十一世紀に入ってからであろう。日本が北朝鮮という具体的な脅威を「発見」したからである。また、防衛庁（当時）も広報の一環として映画の製作に積極的に協力するようになり、製作側も自衛隊の活用に商業的な利益を見出すようになった<sup>(4)</sup>。

次に、中曽根時代の日本映画の動向についてである。

先述のように、中曽根時代は角川映画の全盛期と重なる。メディアミックスを活用し、日本映画としては予算規模の大きな角川映画は、アメリカのブロックバスター方式の映画に対応しよう。作家性が強く「現代的」なアメリカン・ニューシネマとは異なり、ブロックバスター映画の多くはミステリーやSF、アクションといった古典的なジャンルに依存しており、これも、とりわけ初期の角川映画に該当する<sup>(5)</sup>。中曽根時代と重なる中期から後期にかけても、ミステリーでは澤井信一郎監督『Wの悲劇』（一九八四年）、SFでは大林監督『時をかける少女』（一九八三年）、アクションでは井筒和幸監督『二代目はクリスチャン』（一九八五年）などが、すぐに思い出されよう。ジャンルを通じた成功という意味では、イギリスのヘリテージ映画とも重なる。

しかし、中曽根時代、さらには、より広く一九八〇年代の日本映画に、強い政治性を看取することはできない。八〇年代初頭には、舛田利雄監督『二百三高地』（一九八〇年）、松林宗恵監督『連合艦隊』（一九

八一一年、舛田監督『大日本帝国』（一九八二年）などの歴史大作が、相次いで作られた。だが、政治家や政治を直接のテーマにした作品は、先述の『小説吉田学校』のみであり、歴史をエンターテイメントとしてではなく批判的に検証した作品は、ドキュメンタリーの分野で小林正樹監督の長編『東京裁判』（一九八三年）や原一男監督『ゆきゆきて、神軍』（一九八七年）を数えるほどであろう。さらに、アニメ映画で宮崎駿監督『風の谷のナウシカ』（一九八四年）が地球環境問題を先取りしている以外は、同時代の政治を鋭く風刺するような作品はほとんど見当たらない。

多くの日本人にとって、ベトナム戦争は「対岸の火事」であった<sup>(43)</sup>。また一九八〇年代の日本は、大規模なテロや領土をめぐる武力衝突も経験しなかった。アメリカの大統領やイギリスの首相と違って、日本の首相が暗殺の危険にさらされることもなかった。エイズや同性愛をめぐる問題も、日本ではまだ米欧ほど深刻ではなかった。さらに、山本監督『不毛地帯』（一九七六年）を除けば、ウォーターゲート事件がその後のアメリカ映画に及ぼしたほどの影響を、ロッキード事件は日本映画には与えなかったようである。最後に、中曾根個人と映画や文化、セレブとの関係をたどっておこう。中曾根が登場する映画は先述の『小説吉田学校』のみであり、これも多くの脇役の一人にすぎない。その後も、日本の実在の首相を主人公にした映画といえば、伊藤俊也監督『プライド 運命の瞬間』<sup>(44)</sup>（一九九八年）のみである。しかし、この作品も東京裁判時の東条英機を描いており、首相退任後の物語である。アメリカやイギリスに比べて、日本政治の意思決定は文脈依存度が高く、戦後の首相の在任期間は総じて短く、しかも戦後日本には対外的な危機が乏しかった。つまり、映画の素材にはなりにくいのである。また、米英ではテレビが優れた政治ドラマを手掛けることが多いが、日本では放送法第四十一条二の「政治的に公平であること」という拘束があるため、とりわけ、存命の政治家をドラマにはしにくい。

敗戦前に、中曾根は先述のプロパガンダ映画『陸軍』を観て、「日本の悲劇的な運命を予感しながら」<sup>(44)</sup>「滂沱の涙」を流したという。この映画のラスト・シーンでは、田中絹代の演じる母親が、出征して行く息子を涙ながらに見送る。木下監督は親子の情愛を描くことで、国策映画にせめてもの抵抗を試みたのである。母思いだった中曾根は、このシーンに感動したのかもしれない。とはいえ、彼が映画について語ることはほとんどなかった。中曾根は俳句を詠み、坐禅を組み、東西の哲学や宗教について語った。彼が体現しているのは、大衆文化ではなくエリート文化であった。ただし、旧制高校や海軍での生活の影響であろうか、中曾根はよく歌を歌った。歌を唱和することは、若いエリートの間のみならず、エリートと大衆との間のコミュニケーションにとっても、効果的な手段となった。なにしろ、彼は「憲法改正の歌」まで作詞し、レコード化している。

政治家としての中曾根は、「権力、とくに政治権力は、本来、文化に奉仕するものです。文化発展のため、文化創造のためのサーバント（奉仕者）なのです」と語っている<sup>(45)</sup>。彼にとって、文化は「自然的共同体」としての国民の存在証明であり<sup>(46)</sup>、庇護すべき対象であった。大衆文化を含めた文化を、政治や外交の手段として活用するという発想は、日本の経済力の低下にとまなうものである。二十一世紀になると、「クール・ブリタニア」を真似て、「クール・ジャパン」が語られるようになった。

演出家の浅利慶太や指揮者の小澤征爾ら著名な文化人とも、中曾根は交流が深かった。当時の政治家としては、これは異例であろう。他方、一九八〇年まで参議院では全国区があったため、六〇―七〇年代はタレント議員が続出したが、中曾根首相時代の八三年に全国区が廃止され、比例代表制厳正拘束名簿式が導入されたことで、タレント議員は減少した。二〇〇一年に個人名でも投票できる比例代表制非拘束名簿式に改められて、再びタレント議員が増加した。ただし、日本のタレントやテレビ・コメンテーターで政

治的発言をする者には、具体的な政治活動に身を投じる者は少なく、政治家になった者でも明確な政策やイデオロギーを持っている者は少ない。また、米欧のセレブと異なり、日本のタレント政治家には、対外的な発信力やグローバル・アジェンダへの関心が著しく乏しい。グローバルに展開するセレブ外交は、圧倒的にアングロ・サクソン中心である<sup>(47)</sup>。逆に、メディア露出のみをめざすような政治家のタレント化が、日本では進んでいよう。中曾根の体現したエリート文化の後退は、政界でも顕著なのである。

### 「幻の橋」

レーガンを案内人に、アメリカにおける映画と政治の関係をたどる旅も、いよいよここが終着点である。そこで、長い旅路をあらためて振り返っておこう。

十九世紀の末にアメリカが世界の大国の一角を占めるようになったところ、映画が誕生した。一九一一年に生まれたロナルド・レーガンは、その映画と共に育った最初の世代に属する。アメリカが大恐慌に陥り、ヨーロッパとアジアの情勢が風雲急を告げる中で、リンカーンの再来たるF・D・ローズヴェルトが大統領に就任し、世論や議会に直接働き掛けて強いリーダーシップを発揮しようとした。現代大統領制の確立である。そのころ、ハリウッドも全盛期を迎え、スタジオ・システムと自己検閲に支えられた、観客の理解や感情移入の容易な物語性重視の古典的ハリウッド映画を量産し、あるべき大統領像を提供した。現代大統領制と映画の邂逅<sup>かいこう</sup>である。前者は後者にテーマを、後者は前者に支持を与えた。さらに、戦争が両者の関係を補強した。「ダッチ」と呼ばれた若者は、ラジオから聞こえてくるローズヴェルト大統領の黄金の声に励まされながら大学を卒業し、自らもラジオ局に職を得て、やがて、ハリウッドに転じた。現代大統領制と古典的ハリウッド映画の養分を、レーガンは充分に吸収したのである。

## ●著者紹介

### 村田 晃嗣 (むらた こうじ)

1964年 神戸市に生まれる。

1987年 同志社大学法学部卒業。

1991-95年 米国ジョージ・ワシントン大学留学。

1995年 神戸大学大学院法学研究科博士課程修了。

広島大学総合科学部専任講師、同助教授、同志社大学法学部助教授を経て、現職。その間、同志社大学長（2013-16年）。

現在 同志社大学法学部教授（国際関係論、特にアメリカ外交・安全保障政策研究専攻）、博士（政治学）。

著書に『大統領の挫折——カーター政権の在韓米軍撤退政策』（有斐閣、1998年、アメリカ学会清水博賞・サントリー学芸賞受賞）、『米国初代国防長官フォレストアル——冷戦の闘士はなぜ自殺したのか』（中公新書、1999年）、『アメリカ外交——苦悩と希望』（講談社現代新書、2005年）、『現代アメリカ外交の変容——レーガン、ブッシュからオバマへ』（有斐閣、2009年）、『レーガン——いかにして「アメリカの偶像」となったか』（中公新書、2011年）など。

ぎんまく だいてうりょう

銀幕の大統領ロナルド・レーガン ◎現代大統領制と映画

Ronald Reagan, President of the Silver Screen:

US Modern Presidency and Motion Pictures

2018年3月10日 初版第1刷発行

著 者 村 田 晃 嗣

発 行 者 江 草 貞 治

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

発 行 所 株 式 有 斐 閣  
会 社

電話 (03)3264-1315〔編集〕

(03)3265-6811〔営業〕

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・大口製本印刷株式会社

© 2018, Koji Murata. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-14923-6

 本書の無断複製（コピー）は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、（社）出版者著作権管理機構（電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。